

# 総合的に幼児教育を捉える力

## ～音楽表現から考える「保育内容・表現」～

寄 ゆかり\*

Comprehensive ability to capture early childhood education  
～Thinking from musical expressions "childcare content, expression"～

Yukari Yori

---

【キーワード】音楽表現、音楽教育、「保育内容・表現」、幼稚園教育要領、領域「表現」

### はじめに

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の幼児教育では、「環境を通して行う保育」「遊びを通して総合的に学ぶ」ことである。幼児教育現場においては、保育者は保育5領域をもとにその保育を行っている。しかしその中でも領域「表現」では、音楽表現、造形表現、身体表現等、多岐に渡っており、長年、この領域「表現」の捉え方についても、多くの研究が進められているところである。

筆者は(寄 2016)において、6領域時代の「音楽リズム」が、そのまま「5領域の『表現』」に移行したのではなく、なぜ、領域「表現」となったのか、保育で行う音楽とは何をすべきか、そのための保育者養成校の音楽カリキュラムの在り方について、研究を進めてきた。この音楽が領域としての「表現」に含まれているという点、保育者にとって音楽は、ピアノの高度な演奏力向上に力点を置くのではなく、様々な音楽表現方法により、保育者自身がその表現を楽しむことが、子ども達の自発的な表現力を育てることに繋がる。そしてそのことが、子どもの表現力を引き出すことができる保育者となると結論付けた。

また、勤務校では、教員免許更新講習も2006年度より行っている。担当科目「子どもの表現力を育てる音楽指導」(選択)では、募集時の質問で「講習時に受講者がピアノを弾く機会がありますか。」というものが最も多い。実施前の「意識調査」においても、「ピアノを短期間で上達する方法を教えてください」「ピアノ演奏が苦手なので、現場でよく使用する幼児の担当

---

所属および連絡先

\* 大阪千代田短期大学

を辞退している。」という意見や、「新任教員がピアノを弾けないために、保育に音楽を取り入れないで困っている。」との声がベテラン教員から聞かれるなど、ピアノに関するものが多い。これらはやはり、保育における音楽＝ピアノ演奏力と捉えられていることが、大きいと考えられる。

文部科学省中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（2006年7月）では、

「教員一人一人の資質能力は決して固定的なものではなく、経験を積むことにより変化し、成長が可能なものであり、それぞれの職能、専門分野、能力・適性、興味・関心等に応じ、生涯にわたりその向上が図られる必要がある。教員としての力量の向上は、日々の教育実践や教員自身の研鑽により図られるのが基本である。」

としている。ここでいう研鑽とは、幼児教育における音楽では、ピアノだけではない。

本研究では、その基となる保育者養成校の授業展開について、保育内容「表現」における先行研究や研究授業をもとに、音楽の側面から検討する。保育現場で求められている保育者の音楽について、ピアノなどの演奏技能だけではなく、領域「表現」における音楽、すべての領域との関わりをもった音楽授業を現在も展開している。ここからさらに、領域「表現」を通じた総合的な保育内容を捉えられる保育者養成のための音楽授業の在り方を、次期幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、次期幼稚園教育要領他と記す）改訂もふまえ、探ることを目的とする。

## 1. 領域の考え方

2018年4月より、新しい幼稚園教育要領他が施行される。そして、3歳児以上の幼児期の施設での教育を「幼児教育」と呼ぶことで統一される。幼児教育において、初めて一斉に施行されることとなり、3歳児以上については、共通の記載となる。保育内容5領域は、すべての幼稚園、保育所、認定こども園の3歳児以上について同一のもので指導されることとなる。

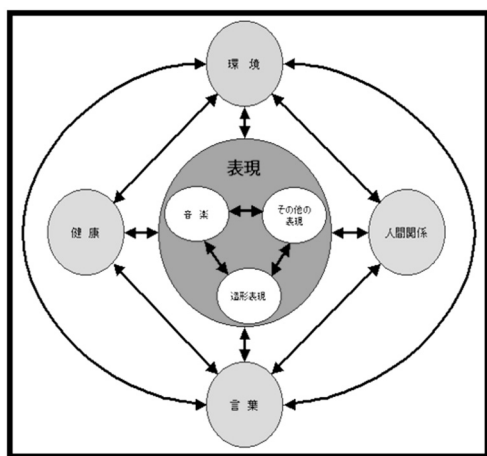


図1 音楽と保育5領域との関係

筆者は（寄 2008）において、領域「表現」における音楽と5領域の関係を左記の通り示した（図1）。表現における音楽からみる5領域の関係ということになる。次

筆者は（寄 2008）において、領域「表現」における音楽と5領域の関係を左記の通り示した（図1）。表現における音楽からみる5領域の関係ということになる。次

期幼稚園教育要領等においても「各領域のねらいを相互に関連させ、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』（5領域の内容をふまえつつ、幼児期の特に5歳児修了時までには育ってほしい具体的な姿として、「健康な心と身体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形、文字等への関心」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」）や小学校の学びを念頭に置きながら、幼児の調和のとれた発達を目指し、幼稚園等の教育目標等を踏まえた総合的な視点で、その目標の達成のために必要な具体的なねらいや内容を組織すること」としている。それらを幼児の場合は、遊びを通して総合的に行うのである。また、この『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』は、決して到達目標ではなく、幼児が身に付けていくことが望まれるものを抽出しているものであり、これもまたひとつひとつの項目を個別に指導するものではなく、「育ってほしい姿」であることも留意すべきである。また、次期幼稚園教育要領等では、特に「幼小接続」が謳われている。これまでとも言われてきてはいるが、特にこの『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を幼児教育と小学校とが共通認識することで、幼児教育から小学校へのスムーズな移行が実現できると考えられている。

幼稚園教育要領等に基づき、幼児教育現場では展開されているが、養成校では、多くの場合、領域別科目として開講されている。それらを「保育内容総論」で基本的な5領域の考え方を示すのではあるが、学生の中には、「一つ一つの領域で指導計画を練る」と捉える学生もいる。実際に立案された計画には、もはやひとつの領域のみでは立案できていることはなく、総合的に捉えるという視点に立てていないともいえる。しかしそれが「表現」に至っては、多くの養成校で「音楽表現」「造形表現」「身体表現」などに分かれており、なおさら、総合的に捉えられない学生も多い。大場（1996：145）は、この養成校での開講科目そのものが、「表現」が領域としておかれたことからすると、乖離しているとしている。子どもの活動は単に絵を描いたり、歌を歌ったりしているだけでなく、そこには様々な体験が加わっている。これを大場（1996：150）は、総合性と記しているが、これらの考え方に基づいた「表現」の科目開講を養成校で行っているだろうか。

この領域の考え方は、小学校以上の教科とは異なった考え方である。1968年に出された『幼稚園教育指導書『一般編』』には、以下の通り記されている。

「幼稚園教育要領第2章において、各領域に示されている事項は、幼稚園教育を行うために、幼児に営ませる必要のあるいろいろな経験や活動を取り上げて、それに含まれているねらいを抽出したものである。そして、このようなねらいのうち類似したものをまとめて、領域を構成したのである。」としている。

これが示された時代は6領域であり、その後、領域の性格が十分に理解されずに、教科と同様の考え方をした保育が行われるなどしたことから、現在の5領域となったとされている。し

かし大場（1996：152-153）は、5領域と6領域では、同じ「領域」という言葉を使っているが、その意味は全く異なるとしている。子どもの活動を似たもので分類したものが6領域であり、5領域では「一人の人間として子どもをどう見るか」、それを『『5つの窓』を開けて、その窓から見ようとする』こと」としている。保育者の側は、かなりこの領域の性格を理解した上での保育を行っていると考えられるが、一方で従前の「音・図・体」という考え方は、未だに積極的に取り入れられている幼児教育現場も少なくない。技能面などを特化した保育として掲げていることが、園の特徴とされていることも多い。

「音・図・体」で言えば、養成校の教員では、実技の専門家も多く、幼児教育の視点に立った教授内容であるか、と問われれば、小学校課程との関係もあるが、もう少し幼稚園教育要領を深く理解する必要があるのではないか、と筆者は感じることもある。もちろんそれぞれの専門技能を習得することも、大変重要である。しかし、幼児教育の場合、それだけではないことは明らかであるが、現状はそうになっていないところも多いのではないだろうか。専門技能を習得するにあたって、「5領域の考え方」「遊びを通した総合的な保育」という視点に立って教授しているかは、それぞれの教員が検証する必要があると考える。またこれは、筆者の今後の研究課題のひとつでもある。

## 2. 保育現場での音楽教育の捉え方

### （1）保育現場での認識

保育者による働きかけにより、乳幼児の音楽に対する意欲は変化すると考えられる。それは、子どもだけでなく、そこにいる両者にとって、音楽活動が楽しい、と感じられるからである。「楽しい」というのは、いつも明るい曲に触れているということではない。そこに取り組む姿勢である。

幼い子どもたちが、遊びながら自然と口ずさんでいる光景を目にしたことは、多くの人があるだろう。子どもは自分の世界に入り、楽しくその場の遊びに合った歌詞を口ずさんでいる。動きを付けたりする子どももいる。周りにいる大人は、何とも微笑ましいと、そっと気づかれないように、その子どもの歌に聞き惚れ、自然と笑みがこぼれてくるものである。何と自然な表現活動であろうか。周囲に気づかれたとわかった子どもは、途端に気まずそうな笑みを浮かべて、歌を止めてしまう。せっかくの素晴らしい表現活動で、即興で永遠に続くオリジナルソングなので、二度と同じものはできないかもしれない。これがまさしく領域「表現」に当てはまるものではないだろうか。「感じたことや考えたこと」を自分の力で、創作していく。遊びのイメージを的確に表現した歌だと感じるがよくある。ゆったりとした遊びの時には、長い音価のものでテンポもゆっくりとしたものである。乗り物ごっこなどの時には、少しスピー

ド感のあるポップな曲など、子どもの創造力は素晴らしいと感じる。これらに気づける保育者になってほしい。

本来ならば、大人でも同様のことが言える。学生や先の教員免許更新講習でも同様の質問を行ったが、「歌うことは好きか。」という問いに対しては、ほぼ100%が「好き」だと答える。しかし、「音楽は好きか。」という質問をしたところ、60%くらいに下がったことがある。なぜ、このように大きな差が生じたのかといえば、やはり「ピアノ」である。保育者養成校での「音楽」というのが、「ピアノ」をイメージさせ、それが直接、このような結果に結びついていると考えられる。しかし、保育現場では、「保育内容・表現」であって、「ピアノ」ではない。この固定概念を覆すことも、先行研究でも多くなされているが、未だにこの印象は強い。

大場（1988：137-138）は、著書『幼児教育の基本を考える』の中で、次のように述べている。

「子どもの人間としての大事な表現力を、音楽や造形やドラマティックな活動を手がかりにして、あるいはそれを中心としながら、豊かにパイプをつくってやる。そういう人間としての表現の自由性を獲得できるような、その根っこを育ててやるのが、今度の表現という分野の大事な発想だと私は思うのです。」

これは子どもだけではなく、先に述べた子どものように、自由に歌っている姿などは、実は大人にもある。気がつけば鼻歌などを歌っていることもあるし、流れる音楽に自然と身体でリズムを刻んでいることもある。また、ここで言う「今度の」というのは、平成元年の改訂のことを述べているが、現代の領域「表現」にも同様のことが言える。

養成校においても教員の働きかけ、教員の音楽に対する意欲等が直接、学生に反映されることを感じ取る場面がある。例えば歌唱の場面で、教員の楽しさを学生にもっと感じてほしい、と更に歌を歌うと、それに乗せられるように、相乗効果で見事なハーモニーになることがある。その瞬間に空気感が変化することを、そこにいる誰も（学生も教員も）が感じている。「教える」という概念ではなく、「ともに学ぶ」<sup>1)</sup>「ともに楽しむ」という感覚が、表現活動においても重要なキーワードになると思われる。次に、幼児教育現場からみる音楽教育の捉え方を保育実習後のアンケートから探る。なお、本調査は本研究教育目的に使用するものであり、対象者には了承を得ている。

## （2）保育現場での音楽の捉え方、方法について実態の把握アンケートの実施

対象学生：本学幼児教育科1回生（58名）

実施時期：2016年12月（保育実習Ⅰ（保育所）2016.11月～12月の10日間終了後）

質問事項：以下に示す。

### ①「実習中に保育者がピアノ、その他鍵盤楽器を演奏する場面を見ましたか。」

→「ある」と回答のうち、3～5歳クラスの担当学生（58名中38名）では88%

※「ある」との回答からは、やはり鍵盤楽器を用いた保育では幼児の方が多くと言える。

保育所実習アンケートの為、鍵盤楽器の使用機会は、幼稚園実習（2015.6月実施アンケートでは、100%）と比較すると少ないことがわかる。

## ②「園での音楽の位置づけはどのように感じましたか？」（学生の回答のまま掲載）

- 1) 担任の先生がピアノが得意かそうでないかによって、保育の内容が大きく変わると感じた（だから、ピアノも頑張らないといけない、と思った）。
- 2) 子どもたちは、歌う時はとても楽しそうだった。
- 3) 音楽が中心の園（鼓笛隊、太鼓など）だったので、先生たちも演奏を教えるのに必死だった。先生たちの必死感が子どもにも伝わっていて、子どもも先生も楽しくなさそうで、しんどそうだった。
- 4) 実習の間、手遊びくらいしか歌う場面がなかったので、もう少し音楽があってもいいかな、と思った（保育室にピアノやキーボードもなかったので難しいとは思う）。
- 5) ピアノをもっと頑張って弾けるようにならないといけない、と思った（練習不足）。

### <考察>

1) の学生がピアノに対する意欲（「だからピアノもがんばらないといけないと思った」）が芽生えたことは、気づきによるもので、実習での観察が効果的に働いていると考えられる。

また、保育の内容にまで意識できたことは、実習での大きな学びだと思われる。全体の回答としては、予想通りではあったが、ピアノの得意、不得意といったものに注目されている。ここでも音楽＝ピアノの意識は、学生、保育所ともに高い。保育者養成校での音楽に関する授業内容、保育5領域での音楽の在り方を理解するには、まだ時間を要すると思われる。

5) の意見が圧倒的に多かった。もちろん練習不足を反省し、真剣に練習に向かう多くの学生の姿が見られたことは、これも実習での大きな収穫だとみている。

幼児教育現場では、年齢が高くなるほど音楽の指導方法としてピアノを用いることは多い。

保育実習後のアンケートから見ても、学生の意識はもちろん、保育者も音楽＝ピアノという意識傾向は高く、ピアノの得意でない保育者はどうしてもそこから遠ざかる傾向にはある。もちろん、ピアノを用いた保育も必要である。しかし、音楽の技術指導を行うのが、保育ではない。単純にピアノの演奏がうまくいけば、幼児教育としての音楽の役割を果たすことができるのだろうか。このためには、養成校の授業を改編していくことから始めなければならない。これらの課題を改善すべく、以下の研究授業を行った。

### （3）研究授業の実施①

対象学生：本学幼児教育科2回生（20名）

実施時期：2017年1月

授業名：子ども音楽療育演習

授業テーマ：簡易伴奏による歌唱指導

伴奏形態の違いによる音の鳴り方、感じ方を比較する

教材：思い出のアルバム

実施方法：①ミュージックベルを用い、ベース音（C・F・G）のみによる歌唱

- 1) 教師の「C→ゲー、②F→チョコキ、③G→パー」の合図で、自分の担当しているミュージックベルをならす。
- 2) その音を鳴らしながら、歌を歌う。
- 3) 教師役を学生と交代し、学生から、ゲー、チョコキ、パーの指示を出す。  
②次に一人ずつ、ピアノの弾き歌いを行いながら、歌ってみる。
- ③授業後、考察を記入

学生の考察：（学生の回答のまま掲載）

- 1) ミュージックベルは、メロディーを奏するものだと思っていたが、今日は、伴奏としてやってみて、これでも十分、曲の雰囲気にも合っていてとてもよかった。
- 2) 3音だけなのに、きれいな音でよかった。また、たくさんの音（伴奏音）がない方が、歌がよく聞こえたように思う。歌がよく聞こえるので、緊張は少し増したけど、歌っている感が強く感じた。
- 3) 先生役になって、ミュージックベルの合図を出す役をやった。みんなが見ているので間違ったらあかん、とすごく緊張したけど、やって楽しかった。また、コードを覚えてなかったの、楽譜を見ながらやっていたけど、子どもの方を見てやるためには、これくらい覚えておいた方が早い、と思った。
- 4) ミュージックベルのみんなでする伴奏パターンから、ピアノ弾き歌いパターンでやってみると、ピアノを見つめてしまい、子どもの様子を見る余裕などなかった。ミュージックベルでやる方が、みんなで行っているという楽しさがあったように思う。

#### <考察>

この授業は2回生の選択授業であり、比較的、音楽の好きな学生が集まっている。ピアノを得意とする学生も数名いる。授業時に「ミュージックベルとピアノの演奏での違いに注目して演奏してみる。」というねらいを掲げ、展開した。最初は、ミュージックベルのみの単音だけで「伴奏」が成立するのか、といった質問が出た。伴奏とは、ピアノでするものであり、キーボードなどその他の鍵盤楽器は、ピアノの代替であるとの意識が強いように感じた。それがミュー

ジックベルという鍵盤楽器でないものである。教師役となって合図を出す学生も、それを受けて演奏する学生たちも、「歌を歌いながら」と指示しなくても、自然と口ずさみながらミュージックベルを奏でていた。また、例えば強弱の変化をつけてみよう、ということを行ったが、その時には「指示を見ていないとできない。」と合図の学生の表情をしっかりと見つめる姿が見られた。

その後、各自がピアノ伴奏による弾き歌いで行った。ピアノの授業にて、初心者の学生も簡易伴奏にしても、全員の学生が弾き歌いできる曲ではあるが、「弾き歌いだとメロディーも弾いていただけれど、ベルの方が歌がよく聞こえた。」「みんなでベルで伴奏する方が、一体感があった。」など、ミュージックベルでの伴奏の有効性を挙げる学生が多かった。

これらは、学生だけでなく、幼児期の子どもにも共通していえる音楽表現であると言える。今回の研究授業においても、通常「弾き歌い」になると、ピアノに向かい余裕のない表情になることの多い学生たちが、ミュージックベルでの簡易な伴奏のもと歌っている表情からは、音楽を楽しんでいる様子が見られた。ピアノの苦手な学生たちからも、『「伴奏をしながら歌う』という意識を持たせた』との意見が出た。また、これまで音楽は演奏力である、と捉えていた学生たちが、保育の中での音楽の在り方を探求する中で、もっと広い視野で保育を考えられる様子も見られた。これは保育者としての資質向上にもつながると考えられる。

演奏の上手、下手という評価ではなく、音楽活動が楽しい、表現することの楽しさを感じるものが「表現」領域の目指すところである。鈴木（2010：10）は、「“表現”とは、自分の意志（感情）や考えを、誰か（何か）に向けて意識的に伝えようとすることである。つまり表現は、無意識に行う表出の行為を基礎にしながら、意図的に自分の内側にあるものをあらわにしようとする行為なのである。」としている。

授業者である著者も、演奏の仕上がり、学生の表情等を観察していたが、例えば教師役の合図を出す学生が間違っても「ああ、もう一回やな。」「しっかりしてや。」とそれを責めることなく、笑顔で自然と始めからやろう、とする姿や、「歌とベルの始めが揃っていないから、みんな合わせよう。」「最高音はここやからな。」と自分たちで曲を仕上げていく段階で、自然と表現する姿が見られたことは、普段の授業では見られない姿であったと思われる。このように学生たちが自ら主体的に、対話的な学びの中から、曲の完成度を高めていくような深い学びができたことは、まさしくアクティブラーニングであり、別の側面からもこの研究授業での効果が確認できた。また、ピアノの得意、不得意に関わらずできるミュージックベル、単音での伴奏の有効性、学生から挙げられた意見の通り、今回はミュージックベルでの伴奏の有効性ととも、保育者自らが感受することにより、主体的な学びに発展することが確認できたとみている。

このような取り組みを、幼児教育現場の職員研修でも行ったが、「音楽は苦手です。」「自分が持っているワンパターンな保育でしか子どもたちに展開できていない。」と話していた現場



の先生方が、この研究授業と同様の展開で行ったところ、学生と同じような表情が見られた。「自分たちが演奏することがこんなに楽しいと思わなかった。」「先生にどんどん引き込まれて、あっという間に時間が過ぎていった。自分はこのような保育をできているだろうか。」という意見も聞かれた。また、学生の展開よりも更に進め、コード奏での展開も行ったが、「ハーモニーの豊かさ」「合わせる楽しさ」など、深い学びから感じる喜びに繋がったのではないかと考えている。教材の豊富さ（「新しい曲を勉強していない」「最近の曲はわからない」といった声も幼児教育現場からは聞かれることがあるが）や演奏技術力ではなく、「ともに学び」<sup>2)</sup>「ともに楽しむ」ということが、表現活動にとって最も重要であることを、ここでも検証できたのではないかと考える。

### 3. 総合的な観点から音楽表現を捉える

筆者（寄 2014）においても、本学開講の「音楽Ⅰ（ピアノ）」「音楽Ⅰ（ソルフェージュ）」のうち、「ピアノ演奏力向上のみが保育者養成に必要な音楽力ではない。」との研究結果より、新しい科目（教授内容の見直し）を提案し、これまでの「音楽Ⅰ（ソルフェージュ）」を「幼児の音楽表現」と改めて、現在、授業を展開している。現行の幼稚園教育要領の「感性と表現に関する領域『表現』」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、

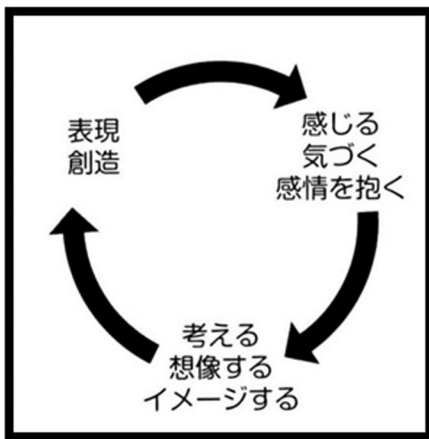


図2 音楽表現の生成の循環

出典：無藤隆監修，吉永早苗著（2016）「子どもの音感受の世界—心の耳を育む音感受教育による保育内容『表現』の探究」『萌文書林』

豊かな感性や表現力を養い、創造性を豊かにする」とある。このことを吉永（2016：25）は、『感じる・考える』という過程があって、表現もまた生まれるというわけである」として、その生成過程を、左（図2）のように示している。

筆者は、この考えに基づき、保育において必要な音楽表現力とは、まずは「音楽を楽しみ」と思えること、「感じること」から、「考える」、表現に繋がる過程を保育者自身が感受することにより、自らが行う保育においても乳幼児から豊かな表現力を生み出すのでありと考える。このような考えのもと、本学での「保育内容・表現」授業も行うべきであろう。

また、大場（1998：142）は、子どもにとっての活動が、どのような意義があるかを保育者がしっかりと理解する必要があるとしている。これは私たち養成校の教員が、学生との関係、授業での様子を理解することと同様だと考えら

れる。ここでは、音楽表現の立場から示されているが、筆者は、総合的に保育を行う上で、やはり領域すべてが関わり合い、すべての領域で表現がなされていると考えている。音楽や造形、身体だけが表現ではない。幼稚園教育要領に示されているように「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して」ということは、幼児教育のどの場面においても、表現の方法は様々であるということを保育者は認識しなければならないと考えている。筆者の場合は、それが「音楽表現」からのアプローチになるだけである、と捉えている。但し、この幼児教育の長い歴史の中で、最も技能面を中心に行われてきた保育者養成校の音楽授業においては、他の教科目よりも改善が必要であると思われる。

これらの考えより、保育者の感受を引き出す研究授業として、次の通り行った。

## (2) 研究授業の実施②

対象学生：本学幼児教育科1回生（62名）

授業名：幼児の音楽表現Ⅱ

授業テーマ：他領域との関連を考えた音楽表現

実施時期：2016年11月

実施方法：①前週に「秋を感じる」写メを撮影し、タイトルをつける

②他の学生が撮影した写メを見て、タイトルをつける。

③イメージできる曲を探す。



図3 撮影者がつけたタイトル：  
秋の訪れ

◇他の学生がつけたタイトル：いろんな色があるよ！

◇この写真を見てイメージした曲：「もみじ」「真っ赤な秋」

◇他の学生がつけたタイトル：黄金色の朝

◇この写真を見てイメージした曲：「夕やけこやけ」  
「七つの子」



図4 撮影者がつけたタイトル：  
朝日と雲海とススキ

## &lt;考察&gt;

この授業は、先に示した勤務校でのカリキュラム変更を行った2015年度より実施している。当初は、「保育者として年間の行事等を理解するためや、季節や旬を感じてほしい。」とのねらいにより行っていた。常に授業でも「保育者が季節を感じられる、風の音、空気のおい、嬉しい、楽しい、悲しい、どんなことも『感じる心』（感受する）を持っておいてほしい。これがすべて、保育で行う『環境による保育』に繋がると考えられる。音楽の授業だからと、歌ったり、弾いたりするだけが、保育者として吸収する知識ではない。すべての環境を考えて、この時期にこの歌を、ここではこのような手遊びを、この空間をどう活かすか、と考えていく視点が必要である。」と伝えている。近年、写メが流行することを受けて、注意するばかりでなく、それならばそれを逆手に取って、その『感じる心』を表す方法として、授業に取り入れようとの計画からこの課題を始めた。

本学は入学式の頃、桜並木の素晴らしい道をバスで通ってくるのだが、残念ながら、殆どの学生がその風景を見ずに来ている。バスの中でもスマートフォンを見ているらしい。保育者としては、周囲の環境にも常に敏感になってほしい。そのために「ベストショットを撮影するために、吟味する」「周囲の風景を自分の目で見る」という感覚から、環境を『感じる心』を持ってもらうというのが目的である。また、タイトルをつけることから、自らのボキャブラリーの中からふさわしい言葉を選択するなど、複合した目的を設定している。前期にも季節ごとの写真として、このねらいのもと撮影を課題に提示しているが、最初は写真の良し悪しを競うようなものであった。そのため、タイトルについても、前期であれば、「春のお花」「チューリップ」、「あじさい」「雨の日」など、安易につけられたものが多かったように感じている（毎年、そのような傾向があるが、その傾向は年々、強まっているように感じている。ここは、また別の研究課題として挙げられる）。しかし、後期授業くらいになると、他の学生を認め、その写真から感じられるイメージや「歌ってどんなんあるかな?」「この写真、めっちゃきれい、秋って感じ」など、学生同士がここでも主体的な学びに変化していることが確認できた。毎回、学生たちには、氏名を伏せて「写真」「タイトル」を見せ、「タイトルと写真がぴったり合っている写真を選ぶ」ということを行っている。そこで選ばれた作品を今回、掲載している（図3・図4）が、モノクロのため色合いなどが見えないのが残念である。そこで、①撮影し、写真にタイトルをつけるだけでなく、②自分ならその写真につけるタイトルは、③この写真をイメージした曲は、と追加した課題の設定となった。

研究授業では、「写真撮影の課題が出て、始めて知らない花を見つけることができた。」「歌になんで写真が関係あるん?と思ったけど、確かに『どんな曲が合うかな』と今まで習った曲とかで思い出そうとした。」「かっこいい写真を見ていると、子どもたちに見せてあげたいけど、本物を見たいね、って声かけるかな?」等の意見が学生から出された。保育者養成校の音楽の

授業において、歌唱や楽器演奏など演奏力、技術力の向上に留まることなく、「音楽の側面から総合的に保育を捉える」という考え方を教授する一方法として展開できたのではないかと感じている。これはまた、先の(図1)に示したように、音楽からみる保育5領域との関係を意識する授業展開である。

#### 4. まとめと今後の課題

今回、次期幼稚園教育要領等での改訂もふまえ、保育者養成での総合的に保育5領域を捉える音楽授業の在り方を検討した。しかし、今回、5領域で大きな改訂があるのではなく、これまでの保育内容「表現」の考え方をもとに、改めて授業展開を考えていくこととした。

幼稚園教育要領「表現」[内容の取扱い](3)に示されているように「表現する過程を大切にすること」からも、今回の研究授業においても、その表現する過程を楽しむ姿、アクティブラーニングが展開されている様子が見られた。それは(図2)音楽表現の生成過程においても、表されていると考えられる。

研究授業①では、最初、単にミュージックベルで伴奏する、ということに、楽しさを求めている学生たちであったが、その生成過程において、自然と歌う様子であったり、お互いに気づいたところを言い合うなど、普段の授業での教師の働きかけに対して答える姿とは大きく異なった。この授業では、鍵盤楽器だけが音楽の伴奏をするものでないことや、教師からの一方向による音楽場面の設定ではなく、子どもとともに作り上げる幼児教育現場を想像してほしい、そのことにより「保育内容・表現」の求めている内容を理解してもらおう、という授業者の意図があったが、予想以上の様々な結果を生み出したと感じている。これには、授業者の気づきが重要である。例えば意図した方向に授業が展開しない場合に、つつい教師は矯正しようとする力が働く。これは幼児教育現場でも同様のことがいえる。設定保育という形で保育を展開し、保育者の意図した方向とは異なった活動に進んだ場合、保育者はどうするだろうか。本来は、これが面白い展開であったり、予期せぬ方向に進む緊張感であったり、異なった大きな学びがあると考えられる。

大場(1998:148)は、「私たちは果たして、子どもを本当に表現する人間としてその根っこを豊かに育てているのだろうか、自己批判する必要があります。」と述べている。表現させる保育者の表現になってしまっていないか、ということである。幼児教育現場では、保育者の「設定」という計画のもと、表現してほしい形に誘導する姿を見ることがあるが、本来はこの、領域「表現」をとりまく5領域において、どの領域であっても、子どもの活動に対する保育者の気づき、気づくアンテナが必要であると思われる。

この研究授業①において、筆者である授業者から「自分たちでいいところに気づいたね。」

「先生から言わなくても、どんどん上手になっている。こんなに練習したことないじゃない。」と声をかけると、始めてそこで、自ら、グループの力で高めていっていることに気づく学生、認識できる学生の姿が見られた。

研究授業②においても、音楽とはかけ離れた課題だと感じていた学生たちに、「音楽の側面から総合的に保育を考える。」ことが、どのように展開していくのかを感じさせることができたのではないかと考えている。

これらの授業を展開することで、学生の気づきはもちろん、アクティブラーニングでの展開、単に領域「表現」とは、「音楽表現」や「造形表現」と分割するものではないこと、保育を総合的に捉えるきっかけを作ることはできたと考えている。今後の授業計画として、今回の授業内容を定着させていきたい。

次期幼稚園教育要領他の幼児教育の資質・能力は、1.「知識・技能の基礎」2.「思考力・判断力・表現力等の基礎」3.「学びに向かう力・人間性等」としている。5領域、「幼児期の終わりまでに育ってほしい力」など、文言での表現方法は様々だが、そこに描かれている子ども像は同じであり、総合的に教育していくことが、保育者の職務である。その幼児教育を現場で担う保育者として、保育者養成における学生にそのことを理解できる授業を展開すべきである。

これには養成校の教員が、幼稚園教育要領他の幼児教育を深く理解することはもちろん、一つの教科だけで完結するものではないので、養成校のカリキュラムマネジメントがここでも重要となってくる。次期学習指導要領、幼稚園教育要領他においても、カリキュラムマネジメントは大きく取り上げられていることから、現代に必要な視点の一つである。

養成校という大きな組織の中で、各科目担当教員の専門性に委ねられてはいるが、本来、保育者養成という同じ目標であることを考えると、養成校の方も「総合的に」学生を養成する意識をもう少し持ってもよいのではないか、と思われる。特に「保育内容・表現」については、各養成校で細分化された科目として数科目開講されていることが多く、学生の方でそれらを融合させながら幼児教育現場へと繋げることとなっている。

特に次期幼稚園教育要領他、一斉に施行されることとなり、3歳児以上については、共通の記載となる。すべての幼稚園、保育所、認定こども園の3歳児以上について同一のものが指導されるこの機会は、保育者養成校にとっても、幼児教育を改めて確認する絶好の機会ではないだろうかと考えている。

保育者養成校の「保育内容・表現」の科目内容に留まらず、幼稚園教諭、保育士養成に必要な教授内容を総合的に結び付けるカリキュラムを、養成校全体としてどう構成していくべきかが今後の課題である。

<注>

- 1) 齋藤孝(2007)「教育力」は、勉強するということの基本は、人の言うことを聴くこと、それは本を読むことも含めてである。先人たちの発見したことに対して耳を傾け、しっかりと聴くということが学ぶことの基本であるとしている。

<引用文献>

- 大場牧夫,『幼児教育の基本を考える』, ひかりのくに株式会社, 1998.
- 大場牧夫,『表現原論 幼児の「あrawし」と領域「表現」』, 萌文書林, 1996.
- 神原雅之監修, 鈴木恵津子編著,『幼児のための音楽教育』, 教育芸術社, 2010.
- 無藤隆監修, 吉永早苗著,『子どもの音感受の世界—心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究』, 萌文書林, 2016.
- 文部省,『幼児教育指導書 一般編』, 1968.
- 文部科学省,『今後の教員養成・免許制度の在り方について』, 中央教育審議会答申, 2006. 7. 11.
- 文部科学省,『幼稚園教育要領』, 2008.
- 文部科学省,『審議のまとめ』, 文部科学省初等中等教育局幼児教育課指導係幼児教育部会, 2016. 8. 26.
- 寄 ゆかり,「保育者養成校における音楽教育の方法論的検討—現代的保育ニーズに応えるカリキュラムを中心にして—」, 大阪教育大学大学院教育学研究科修士論文, 2008.
- 寄 ゆかり,「保育者養成校での『保育内容・表現』における音楽教育の位置づけ」,『大阪千代田短期大学研究紀要』第45号, 2016.
- 寄 ゆかり,「表現力育成を中心とする音楽教育—保育者養成における音楽指導の在り方について—」,『大阪千代田短期大学研究紀要』第43号, 2014.